

「地域」から考えるイスラーム

総合政策学部

准教授 見市 建

1 はじめに

本講義には二つの目的があります。第一に、現代世界を知る上で不可欠なイスラームについて理解を深め、文化や政治を見るための一つの視角を得る。第二に、単なる「海外事情」への好奇心だけではなく、多様化する日本社会の「内なるイスラーム」の存在を知ること、です。これはじつは私が総合政策学部で担当している「海外地域研究」のシラバスに書いてある授業の目的そのものです。いわゆる「イスラーム国」をめぐってセンセーショナルな報道がなされ、イスラームという宗教に対しても反発、誤解や偏見が渦巻くなかで、地域の事情や文脈を理解することが非常に大切であると考えています。今日はイスラームについての非常に基本的な知識から、私が専門とするインドネシア、そして岩手県におけるムスリム（イスラーム教徒）の人たちについてまで、なるべく分かりやすくお話ししてみようと思います。

2 イスラームの世界的広がり

イスラームは、メディアなどでは通常「イスラム教」と表記します。アラビア語の発音がイスラームの方が近く、狭い意味での宗教に限らない要素を持つため、現在は研究者の間では「イスラーム」と表記することが一般的です。イスラームは唯一絶対の神（アッラー）を信仰し、その神のメッセージ（啓示）を伝えるムハンマドを預言者とします。ムハンマドに伝えられた啓示を記録したものがコーラン（クルアーン）です。厳しい教義との印象が強いかと思いますが、みなが熱心に守っているかという点必ずしもそうではありません。また宗教的義務とはいっても「努力目標」で、それを行うかどうかは神と人間との関係です。宗教的義務を果たさないことを現世で問われることはありません。コーランはその一字一句が神のメッセージであり、また美しい旋律を備えていますので、アラビア語のオリジナルを唱えることに意味があります。世界中どこからでもメッカに向かって礼拝をし、またメッカへの巡礼が義務とされています。したがって宗教的にアラブの中心性が強いことも大きな特徴です。

しかし人口からみれば最大のムスリム人口を抱えるのは総人口2.4億人の約9割がムスリムのインドネシアです。続くのはパキスタン、インド、バングラデシュ、アラブ諸国はわずかにエジプトがベスト10に入るだけです。同じ中東の大国でもイランやトルコはアラブではありません。パリ、ロンドン、ベルリンのようなヨーロッパの大都市ではそれぞれ100万人を超えるムスリムが住んでおり、社会の重要な構成員となっています。また統一した宗教的権威は存在せず、地域によって宗教的傾向はかなり違います。ムスリム社会の理解には、こうした普遍性と地域的特殊性のどちらにも目を向ける必要があります。

3 インドネシア 「中東と違って」 穏健でいい加減？

ムスリム人口世界一のインドネシアは、世界三位の民主主義国でもあります。都市化や堅調な経済発展のなかでイスラームがより強調されるようになっており、アラブや中東とは違う、むしろより寛容で理想的なイスラームであるとの自負を持つ人々も少なくありません。多宗教間の共存を前提とするインドネシアのナショナリズムが、多くの敬虔なムスリムにも肯定的に捉えられています。1998年にそれまでの権威主義体制が倒れて民主化しましたが、それまでの政権が徐々にイスラーム政治勢力を取り込んできたこともあり、世俗勢力との深刻な対立には発展しませんでした。むしろそれまでの世俗勢力が、より宗教を強調し、有権者の支持を得ようとするのが一般化しています。こうした政治と宗教をめぐる調和的な関係の背景には、2014年に日本でも公開されて話題になった映画『アクトオブキリング』にも描かれた、1965年以降の数十万人にのぼる共産党員虐殺事件の過去もあります。今日は詳しく述べませんが、ここで強調しておきたいのは、インドネシアの穏健さは歴史的に形成されてきたということです。

近年、映画やテレビドラマ、さらに歌謡曲からオカルトの類まで、イスラーム色を出すことで消費者の関心を買おうとする「イスラームの商品化」の傾向がみられます。また従来からの宗教伝統がエンターテインメント化される事例もみられます。その一つにズィクルという行があります。ズィクルとは元々記憶を意味し、神のことを忘れずにいるように、集団で数珠を繰りながら神の名前を唱えたり、神を賛美する歌を合唱したりします。昔から近隣のモスクなどで一般的に行われていたのですが、芸能人のように人気のズィクル指導者が登場し、数千、ときには数万人の観衆を集め、テレビ中継もされるようになりま



【ズィクルの様子（著者撮影）】

した。

2000年代初頭から、アリフィン・イルハムという若い指導者が都市部の中上層向けにズィクルを開催して人気になりました。最近では、ジャカルタ首都圏でアラブ系の若い「イケメン」の指導者によるズィクルが大規模に行われています。こちらはどちらかというと下層の人々を対象にしている、参加者は揃いのジャケットを着て、原付のオートバイに乗って集まります。みなで体を揺らし、旗を振ったり、ときには花火が上がったりと、ロックコンサートのような雰囲気です。

ここでみなさんにお伝えしたいポイントは、第一にイスラームという宗教の実践が人々の楽しみになっていること。日本のお祭りとも比較できそうです。第二に社会の幅広い層に向けてそうした楽しみが提供されていること。経済発展によって格差は広がっているものの、それが宗教の実践をめぐる分裂につながってはいません。第三に既存の宗教団体ではなく、必ずしも組織化されない多様な宗教のありかたが

広がっていることです。近年人気のズィクル指導者たちはアラブ系とはいえ、必ずしもこれまで宗教に熱心な家系に生まれたわけではありません。こうしたインドネシアにおけるイスラームのありかたは、先ほど述べた、政治的にも宗教勢力と世俗勢力が対立しない社会的な背景ともなっています。2014年10月に就任したジョコ・ウィドド大統領も、極めて世俗的な家庭に生まれ、ヘビーメタルの大ファンという人物ですが、選挙のときには宗教指導者たちの応援が不可欠でした。このあたりの話は拙著『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』に詳しく書いていますので、手にとっていただけるとありがたいです。

4 「イスラーム国」とインドネシアの武装闘争派

国際ニュースを賑わせているいわゆる「イスラーム国」についても、インドネシアとの関連を踏まえてお話ししておきましょう。細かい経緯については省略しますが、近いところでは2003年以降のイラク戦争によるイラクの治安悪化、それに2011年以降の「アラブの春」といわれる民主化運動によって生まれた権力の空白が契機になりました。とくに戦争後に民主化の定着に失敗したイラクと、非常に抑圧的だったシリアのアサド政権の揺らぎという機会に乗じて、「イスラーム国」は勢力を伸ばしました。両国にはさまざまな武装勢力が活動しているのですが、「イスラーム国」は巧みな宣伝でメディアの注目を浴び、また彼らが樹立したと称するカリフ制国家（ムスリムを世界的に唯一代表する政治主体）が少なからぬ人々を惹きつけています。とくにヨーロッパでかねてから社会への不満を募らせていたムスリム青年の一部が、「アサド政権や欧米に抑圧されている同志を助け」、「理想的なイスラーム国家を作るために」参戦しています。われわれの目には非常

に残虐で非人道的な側面が焼き付けられています、その暴力性が「崇高な目的」のためであると信じる人々がいるのが、とても厄介なことです。

さて、インドネシアから「イスラーム国」に参戦しているのは、インドネシア政府の発表によれば、2014年8月時点で56人、2015年3月で514人です。実際の戦闘員は2～300人程度だと考えられています。いずれにしろ、2億人以上のムスリム人口からすればその参加者は少ないといえるでしょう。ただ、インドネシアの武装闘争派の起源は独立戦争時に遡り、決してその歴史は浅いわけではありません。1980年代末からはアフガニスタンにのべ数百人が渡り、軍事訓練を受けています。彼らのネットワークが現在の「イスラーム国」支持者に引き継がれています。2014年6月に「イスラーム国」の樹立が宣言されると、インドネシア国内の武装闘争派の間でもこれを支持する集会が次々と開催されました。こうした支持者はおおよそ1000人ほどだと考えられています。一方で、前述のとおりシリアやイラクにはさまざまな勢力がおり、とくに「イスラーム国」と袂を分かったヌスラ戦線を支持する人々も少なくありません。したがって、インドネシアの武装闘争派内部で深刻な対立と分裂が起きています。

インドネシアの社会全体ではどうでしょうか。一般に武装闘争派に対する嫌悪感と「イスラーム国」に対する強い反発があります。同じムスリムというよりも、ある種のカルト組織、社会的な病理である、という見方をする人々も少なくありません。「イスラーム国」の樹立宣言とその支持集会の開催に対して、インドネシア政府は主要イスラーム団体とともに、反「イスラーム国」の全国的なキャンペーンを行いました。「イスラーム国」の出現は武装闘争派の支持を増やすよ

りも、むしろ反発を高めることにつながっているといえるでしょう。

5 日本のムスリム、岩手のムスリム

最後に日本、より身近な岩手県内のムスリムについてお話ししておきます。日本には統計上約10万人のムスリムが在住しています。統計とはいっても、宗教別の統計はありませんから、在住外国人の国籍からの推計です。例えば100人インドネシア人がいれば、その9割はムスリムであろうという推計です。日本人ムスリムのほとんどはそうした外国人と結婚を理由に入信しており、数千人程度だとみられています。モスクは全国に60～70箇所ほど、簡易礼拝所を含めると200箇所以上があります。

地方都市のモスクの現状をお伺いすると、おおよそ数十人のインドネシア人研修生と十数人のマレーシア人留学生、数人のパキスタン人の中古車業者と日本人ムスリムという構成が典型的なようです。事実上日本の労働力不足を補うために、研修生・技能実習生として来日している約16万人のうち、インドネシアは中国、ベトナム、フィリピンに次いで4番目に多く、2万人弱です。地方国立大学にはマレーシアの国費留学生が多く、また日本の中古車輸出業を担っているパキスタン人はおおよそこの地方にもいます。

岩手県のムスリムはやはり統計上200人程度です。構成も他の地方と似ていますが、岩手大学には中国国籍のムスリム留学生が比較的多く、彼らが家族を含め数十人います。これまで岩手大学近くのアパートをモスク代わりに使っていましたが、最近モスクもできました。ただインドネシア人研修生は県南が多いので、仙台に礼拝に行く人もいるようです。我が国ではムスリム人口が少なく、欧米の一部のような

反イスラーム感情も強くないので、これまでのところ大きな摩擦は起きていません。ムスリムに限らず、多様な人々が共存できる社会を形成していくことが大事だと思います。

日本社会とイスラームの関係でより大きな注目を集めているのは、観光客としての期待です。もはや内需の拡大が望めない日本にとっては海外からの観光客がどの地方でも期待の星です。中国や韓国からの観光客に加え、経済発展して中間層が拡大する東南アジアからのムスリム観光客に熱視線が集まっています。そこで問題とされるのが宗教的な敷居です。ムスリムには豚肉や酒の禁忌があります。鳥肉や牛肉でも、決められた処理をしたものでないと食べない人もいます。そこで、宗教的に問題がない「ハラール」の認証を取得する食品業者やレストランもあります。今日みなさんにアンケートを取らせていただきましたが、これはそうした関心から盛岡市と行っている共同研究の一環です。東京都などはハラールの認証よりも、食品の内容表示や礼拝所の位置を示すなど、ムスリムに親切な「ムスリム・フレンドリー」を提唱しています。西日本ではハラールについての勉強会や認証の取得に熱心なところも多いようです。

岩手県や盛岡市では、現状それほど大きな需要はなさそうです。ここまで来られるのは日本を旅慣れた人が多いということもあるかもしれません。むしろ、先のムスリム住民との共存でもお話ししたように、宗教や文化、あるいはさまざまな障害やアレルギーがある方も安心して訪れることができるまちづくりを考えることが重要かと思います。